彼は今再び眼をあけてこの置時計を振り返って見た。時計は今にも動き出して、凜々として鳴る金の鈴に昔の栄華を語り出しそうに思われた。しかしいつまで立ってもその精鋼の指針は凝然として動かなかった。

民族国家主義の虚偽

一

民族は人種や種族のごとく血族の縁で結びつけられた共同体ではない。また、共同の言語や共同の宗教もその標識とはならない。そしてまた、その境界は国家の境界とも一致しない。

民族的結合の中心は、共同の文化、したがって共同の伝統である。共同の歴史、したがって共同の追憶および共同の榮辱感情である。

民族は自然産物ではない。歴史的、社会的産物である。したがって民族意識の範囲は静止的ではなく流動的である。

民族主義は、この共同の文化、共同の伝統、共同の歴史、というがごとく精神的諸要素によって維がる一民族の人格的存在、独立的存在を主張する主義である。

そして民族国家主義は、かくのごとき共同文化団体が外来征服者の羈絆を受くることなしに、主権的統治団体たる地位を維持せんとする、もしくは獲得せんとする要求である。

外来征服者の羈絆に反抗せんとするものは、同時にまた、内部の特殊階級によって課せられたる圧制にも反抗する。共同文化団体の本然的要求の発現を妨げその精神的統一を破る点において、外来の敵と内在の敵とに変わりはない。

されば民族国家主義は、共同の文化、共同の伝統、共同の歴史の保護のために、この両者に対して均しく挑戦する。されば民族国家主義はその究極において民主主義である。

この民族国家主義、すなわち民族主義と民主主義との併行的進歩は、現代世界の政治的趨勢の中心であり、かつ歴史的研究学派と称するもっとも進歩せる最近政治学の一主張である。

以上は、大山郁夫君の「民主主義の政治哲学的意義」(『大学評論』十一月号)による、民族国家主義の内容の大体である。

二

僕はまだ、この民族国家主義者の、いわゆる民族なる人格的存在が実在するものと仮定する。

民族と国家とは必ずしもその境界が一致しない。うまく一致していれば問題はない。が、そうでないと、一と騒動が持ちあがる。なぜなら、民族国家主義は、外来征服者の羈絆を受けることなしに、民族の主権的統治団体たる地位を維持し、もしくは獲得せんとする要求であるか

らである。しかるに、この場合に対する大山君の態度は、全然その民族国家主義を離れたすこぶる妙なものになっている。

大山君は民族意識の範囲の流動的性質を認め、そしてその流動の一原因たる征服の事実を是認し肯定する。大和民族の熊襲征伐や蝦夷征伐を是認する。日本民族の台湾征伐や朝鮮征伐を肯定する。そして熊襲や蝦夷が幾百年の星霜の間に、大和民族とともに、「歴史の埒隅において融解し、陶冶し、合成して、渾然たる単一民族に鍛え上げられた」ごとく、台湾人や朝鮮人もまた、「ついに我等とともに共同文化を仰ぎ、共同伝統を謳歌する同一民族を形成するに至る筈のものである」と独断する。そしてなお、「少なくとも我等はこの民族的融合の時期を一日も早く招来せねばならぬ」と主張する。

民族としての熊襲や蝦夷は、すでに大和民族の中に吸収されて、今はその跡かたもない。しかし台湾人やことに朝鮮人は現にいわゆる一民族として厳存する。もし彼等が、大山君のいわゆる「もっとも進歩せる最近政治学の一主張たる民族国家主義」に従って、彼等の共同文化と共同伝統と共同歴史とを尊重し、外来征服者の羈絆を排除して、その主権的統治団体たる地位を獲得せんとしたら大山君はどうするのか。

しからば大山君は、過去の征服だけは致し方のないものとして是認するかというに、そうでもないようだ。大山君は「専制主義がその民族の共同伝統であつたらどうする」という駁論に對して次のごとく答えている。

これ「愚かなるものの讒言か、權勢閥の特權擁護の口実か、權勢閥に阿諛するものの追従輕薄である。専制政治は少数者の權威もしくは武力をもって多数者を圧制的に支配する情況である。故に専制政治は少数者の伝統であっても、未だかつて民族の共同伝統であつたことはいない。また、民族全体が少数權力者の専制に屈従する期間がいかに長くとも、それはもともとその民族の本然の心理的必要から出たものでなく、しからざる場合にはさらに激烈に落ち來たるべき權力者の殘虐を畏怖する物理的必要から出たものであるから、かくのごとき習慣はいかに長く継続し來たつたものでも、これを正当の意味における伝統であるといふことはできない。社会的征服史を溯れば、専制主義は民族の政治生活上の共同伝統の破壊者であつたことが証明される。この意味から言えば、専制屈従時代は民族の政治生活上の共同伝統の断絶期である。」

かくして大山君は、民族内の過去の征服、すなわち社会的征服について、明らかにその非を鳴らしている。しかし大山君は、この社会的征服の事實に向けた洞察と批難とを少しも民族的

征服に向けることなく、まったく盲目的に、「愚かなるものの讒言か、權勢閥に阿諛するものの追従輕薄か」のごとくに、それを是認し、それを肯定する。

大山君は、民族間の征服の中に、一民族の共同文化の破壊、共同伝統の断絶を見ない。圧制的支配を見ない。そしてその征服の結果を、歴史の坩堝の中の融解、陶冶、合成であるとし、被征服民族の本然の心理的必要であるとする。

しかしこれも、とにかく歴史的研究学派の、政治哲學者の言として尊敬し、一応そうとして仮定して置く。

だが、過去においてそうであつたものが、将来において決してそうでないということが、歴史的研究学派の政治哲學者としてどうして言えよう。過去の民族的征服を認めるものは、同時にまた、将来の民族的征服をも認めなければならぬ。

かくして大山君の、いわゆる民族意識の範圍の流動性は、要するに過去および将来の民族的征服を承認するための一伏線に過ぎなくなる。そして、そのいわゆる近世帝國主義たる民族國家主義は、ニコニコ面のおかめのお面を脱いで、恐ろしい牙をむき出した般若の真相を現して來る。

四

そこで、こんどは、先きに一応は認めて置いた二つの仮定に立ち戻って、その虚偽を取り調べて見ることにする。

第一には、後の方の仮定の、民族間の征服が歴史の坩堝の中の融解、陶冶、合成であり、被征服民族の本然の心理的必要であるということである。

少時僕等は日本歴史を学んで、上古の歴代の天皇が、いかに武力と策略とで、熊襲や蝦夷の征服にその全力を尽したかを知った。僕等はそこに熊襲や蝦夷の本然の心理的必要から起った叛逆の連鎖を見た。また、征服者大和民族の残虐を畏怖する物理的必要から生じた屈従の連鎖を見た。かの歴史の坩堝とは、要するにこの征服的支配の猛火の中に白熱されたものである。

僕等はそこに、熊襲や蝦夷の共同の文化、共同の伝統、共同の歴史、共同の栄辱感情の、破壊と断絶とを見る。大和民族のそれとの、融解、陶冶、合成は、ほとんどまったく見ることができない。

僕はかつて、蒙昧野蛮人の間のこの征服の事実を、『生の闘争』の中の一論文「征服の事実」(編者註・本誌
集本巻所収)によって詳論した。

種族間もしくは民族の武力的征服は、やがて、かくしていわゆる合成された新しい種族内も

しくは民族内の法治的征服に移る。大山君のいわゆる社会的征服にはいる。

僕は今、台湾や朝鮮の征服の事実について、何事をも語る自由を持たない。で、ただ、その事実がこの消息をもっとも明白に、かつもっとも簡略にわれわれの眼前に示すものである、ということだけを注意して置きたい。

五

第二には、前の方の仮定の、共同の文化、共同の伝統、共同の歴史、共同の追憶、共同の栄辱感情というがごとき精神的諸要素によって維がる一民族の人格的存在ということである。

この仮定の真偽を明らかにするためには、大山君のいわゆる社会的征服史を借りて来るのが一番便利である。

社会的征服とは何だ。社会的征服は、まずその社会内の両極の階級、すなわち、征服階級と被征服階級とを予想するものである。大山君はこの両極階級が存在を少なくとも専制主義の社会に認めている。そして大山君は専制主義は民族の政治生活上の共同伝統の破壊者であると言う。専制屈従時代は民族の政治生活上の共同伝統の断絶期であると言う。

しからは、ごく手っとり早く言って、いわゆる大和民族の天降り以来連続として立派な専制主義的政治生活を送って来たわれわれに、どんな共同伝統が破壊し残されているのか。断絶し

いされているのか。またわれわれはこの共同伝統を何処に求めればいいのか。「本源の政治生活への復帰」だという民主主義を、何処の本源に求めればいいのか。

僕はこのことに返事することができる。しかし大山君には恐らくはできない。で、この返事は読者諸君の問題として置いて、大山君の知っている管の社会的征服史の説明をもう少ししよう。

被征服者のいっさいの叛逆的行為に対し、絶えず兵力を用いる困難と費用とおよび部分的失敗とは、やがて征服者の一大負担となった。一時は勝利の誇りに駆られて、その権威に対するあらゆる背反者を一々厳罰に処してもいたが、かく一人一人別々に支配して行く煩に堪えられなくなつて、何等かの纏まった統治の方法が要求されて来た。

まず、もっともしばしば犯される種類の行為を庄伏するために、ある一般的規則を設けることが發明された。そしてこの方法のはなはだ経済的であることが分つてからは、さらに他の広い範囲の諸種の行為にも同様にそれぞれの一般的規則が設けられた。今日いうところの法治的支配の基礎は、かくして置かれたものである。そして、この法律を犯さない間は、多少の自由が被征服者に与えられる。すなわち、この法律に服従することが被治者の義務であり、この法律の違反にならない行為がその権利であると認められる。

また、征服者は利害のまったく相異なる被征服者を統治する困難から遁れるために、被征服者中のあるものの助けを借りる。被征服者の中にも、多少の特権を得て容易にそれに応ずるも

のが出て来る。すなわち、被征服者中の知識者が征服者の階級に仲間入りして、その征服事業の完成に協力する。そして征服階級と被征服階級の一部分との間に、権利と義務とが多少相互的になる。

この相互的ということは、いまだ不平等を肯じない被征服階級に対する、絶好の瞞着手段であつた。知識者等は言う。

「見よ。今やわが国は征服階級のみでない。彼等はすでにその非を悟つて被征服階級たるわれらにも参政権を与えた。」

そしてこの瞞着手段がもっとも巧妙に、かつもっとも組織的に行われたのは、いわゆる国民教育であつた。国民教育とは、要するに、被征服階級をして征服階級との共同の文化、共同の伝統、共同の歴史を有するがごとく妄想させて、共同の追憶と共同の榮辱感情とを強制するものである。

六

利害関係のまったく相反する両極階級を含む一社会の中に、共同の文化、共同の伝統、共同の歴史、共同の追憶、共同の榮辱感情、などが本当にある筈はない。もしあるとすれば、それは瞞着され強制された妄想である。

されば大山君のいわゆる民族なる主観的実在は、実を言えば、主観的妄想である。そして大山君の民族国家主義は、この妄想の上に曖昧と矛盾と虚偽とを積み重ねた、いかさま自由主義である。本当のデモのクライシである。

大山君の民族とは共同文化団体である。そして大山君はまずこの民族に主権的統治権を持たせようとする。しごく結構な主張である。僕等といえども大山君のこの精神に異存はない。しかしこの精神的結合を基礎とした民族は、従来言い古された種々の意味の民族、ことに国民という意味の民族とは、その実質においても様式においてもまったく相異なる筈である。しかるに大山君は、このごとく相反する二つのものを混同させ、というよりもむしろ、前者の精神を後者の現実の中にまぎれこましてしまった。事大的妥協だ。

いわゆる日本民族の中には、他のあらゆるいわゆる民族におけると同じく、大山君の言う意味での大体において二つの相異なつた民族がある。征服階級と被征服階級とである。もっと具体的に言えば、資本家階級と労働者階級とである。

大山君の本当の精神はこの被征服階級の共同伝統の恢復である。ことには専制主義の遺物たるいわゆる官僚政治の下に蹂躪されている民衆の共同伝統の恢復である。そこで大山君の主張は、この精神に従って、官僚政治に対抗する民衆政治となる。

しかし大山君は主として社会を政治的に見る結果、その経済的方面を大ぶ疎そかにする。し

たがって専制主義と民衆との関係についてはかなりよく分つていても、資本主義と民衆との関係についてはよく分らない。したがってまた、政治の根本である経済のことを忽かせにするところから、その政治上の主張も本当には徹底しない。

それに大山君は、国家的権力に迎合する教育を受け、またそれに阿諛しなければならぬいわゆる物理的の必要を感じて、あるいは無意識的に、あるいは意識的に国家的権力に都合のいいような嘘をつく。そしてついには、この嘘が嵩じて本物となり、先きの精神はいずこへか消え失せてしまう。

かくして大山君は、その精神のままの主張、すなわち本当に共同の文化、共同の伝統、共同の歴史、共同の榮辱感情を有する人々の間の、あるいは共同の利害の下に新たに共同文化団体を形づくらす人々の間の、自由なる自治と連合というような主張にまで徹底することができない。

大山君はかつてその民主主義の不徹底を山川均君に痛撃されて、いったんそれに返事する約束をして置きながら、あとで「どうもあれに返事すると本音を吐かなくちゃならんで」と言つて逃げてしまった。しかし、よし大山君がそのいわゆる本音を吐いたところで、それがその本当の精神そのままでも出るかどうかはすこぶる疑わしい。

大山君はやはり一生うそ音ばかり吐いて、盲の手引する盲になつていんだらう。

革命的サンジカリズムの研究

新文学博士米田庄太郎氏を論ず

一

先頃、京都帝国大学文学部、経済学部講師米田庄太郎氏の、『晩近社会思想の研究』中巻、『革命的サンジカリズムの研究』前篇が出た。新聞紙の伝えるところによれば、最近米田氏が文学博士に選ばれたのは、この『晩近社会思想の研究』上中二巻の著によるのだという。

上巻は読まないから知らないが、この中巻は、今ちょっと一時間ばかり拾い読みして見たところでは、たしかに何々博士の学位に値いする。

その理由は、第一には、それがアメリカはコロンビア大学政治科発行、史学経済学および公法研究叢書第四十六巻第三号、哲学博士ルイス・レヴィン著『フランスにおける労働運動、革命的サンジカリズムの研究』の巧妙な焼き直しであるからだ。と言っただけでは知らない人には分るまいが、この原著は博士論文である。アメリカの博士論文を日本に持って来て、それで博士になれないという法がどこにある。

しかしそれだけではまだ博士になる十分な理由とはならない。もう一つ大事なことがある。ことにその問題が、社会の、または国家の秩序に触れる時にそうだ。すなわちその第二の理由は、「読者がもし余の本書中に詳論するところをよく注意して閲読せられんには、仏国の革命的サンジカリズム」は「その国特有の経済的、政治的、民族的、歴史的、その他の社会的事情にもとづいて発生し発達せるものにして、それらの社会的事情の存在しないわが国においては、たといそれらの思想や運動を輸入せんと企だつるものがあるが、それは決して成功するものでないことを理解されるであろうと思う」(緒言八—九)という出鱈目極まるまっとうさっぱちの屁理屈が力説されているからだ。

もしこの第二の理由が無視されるなら、さしずめ僕なぞは、とうの昔に博士になっていなければならぬ筈だ。レヴィンを初めて日本に紹介したのは僕だ。一度だけじゃない。三度も四度も雑誌の上で紹介した。幾回かにわたっての講演もした。全部の翻訳もした。また僕の諸論文の中にはいふんこの本の無断ぬき書きがある。そして僕があんまりこの本を讀め立ててそれを推奨した結果、だろうと思うが、とうとうこの本は輸入禁止になってしまった。

米田氏は日本では稀れに見る篤学な社会学者だ。熱心なサンジカリズム研究者だ。僕は氏の、この篤学さと熱心さとは、いつも多大の尊敬を払っている。ことにそのサンジカリズムに関しての、きわめて忠実な紹介については、尊敬どころではなくありがたく感謝しているく

らいた。こんどの『革命的サンジカリズムの研究』にだってやはりそうだ。したがって、実はあまり悪口をつきたくはないのだが、少々癪にさわるので憎まれ口をきいて見る。

一

先きに言った第一の理由というのは実はどうでもいいので、大して書き立てる必要もないのだが、言ってしまった以上はもう少し何とか言わなければなるまい。ただ焼き直しだと言いはなしただけでは、氏に対する敬意を失うことにもなるだろうから。

詳しいことは言わない。まずレヴィンの原著と米田氏の何著というかとにかくこの著書との、両方の目次を較べて見る。レヴィンのは、第一章が「パリ・コミューン以前のフランスにおける労働運動（一七八九年——一八七一年）」第二章が「労働総同盟の起原（一八七一年——一八九五年）」第三章が「労働取引所連合」とある。米田氏はその第一章にこの三章を縮めて、「仏国における労働運動の発達と労働総同盟会および労働取引所連合会の成立（仏国大革命より千八百九十五年まで）」としてしまった。仏国大革命というのは、誰でも知っている通り、一七八九年に起った。

レヴィンの第四章は「一八九五——一九〇二年間の労働総同盟」、米田氏の第二章は「労働総同盟会と労働取引所連合会との合同、並に両者における革命的サンジカリズムの根本思想の

形式（千八百九十五年より千九百二年まで）」。

レヴィンの第七章は「一九〇二年以来の労働総同盟」。米田氏の第四章は、前項と同じく、ただその題目を少々内容的にして、「労働総同盟会内における革命的サンジカリズムの発達並にその優勢、総同盟会の運動の過激化（千九百二年より千九百九年まで）」。

レヴィンの第五、第六の二章が米田氏のに欠けているのは、それが「革命的サンジカリズムの理論」とその「理論家」とであって、それは米田氏が後篇で論じる筈になっているからだ。

なお、レヴィンの原著は一九一二年の出版で、労働総同盟の年代記は前章の一九〇九年で終り、その最後の第八章は「革命的サンジカリズムの特性と諸条件」となっているが、米田氏はそれを抜いて、その最後の第五、第六章を「労働総同盟会内における改良主義サンジカリズムの勢力の発達、総同盟会の運動の穏和化（千九百九年より休戦条約成立まで）」、「休戦条約成立後における労働総同盟会穏和化の形勢（大正七年十一月より大正八年十二月まで）」とした。大正九年一月発行の米田氏の著書としては当然のことである。

こう書いて来れば改めて言う必要もあるまいが、米田氏の『革命的サンジカリズムの研究』は、少なくともその大体の結構において、確かにレヴィンの『革命的サンジカリズムの研究』の立派な焼き直しである。

米田氏の焼き直しは決してその大体の結構だけにとどまっではない。もっと細かい結構にまでも、十分に、そしてこれはことに注意して置きたいが、巧妙に行きとどいている。この巧妙にというのは、くろうと向きすなわち学者向きにはなく、しろうと向きすなわち俗人向きにという意味だ。

しかし今僕は一々その実例を挙げて行くほどのひまがないので、この細かい結構のことについてはこれ以上に何にも言わない。もっとも、言えという御注文があれば、いくらでも言う。

が、そんな書物の結構なぞという書物製造人専門のことはよしにして、もっと細かく、こんどはレヴィンと米田氏との文章を一行ずつ較べて見る。

近代国家の第一原則は国家の中の国家を許さないことである。国民は国家の下におけるいわゆる一般的利害以外に独立した共同的利害を持たない。されば、近代国家の一好典型であるフランスにおいても、その形成の最初すなわち大革命の際に、まず旧来の同業組合団体であるギルドを禁止し、さらに一八九一年六月のル・シャプリエ法令によって、その後の新同業組合で

ある労働者団体の上にこの禁制を確立した。

このル・シャプリエ法令は、フランスにおける労働運動の歴史の上にきわめて重大であるほかに、近代国家の特性を知る上に欠くべからざるものである。

レヴィンの原著も米田氏の著書も、等しくこのル・シャプリエ法令によって、その第一章第一節を始める。

「吾人は、ル・シャプリエがその法案提出の理由としてのべている中に、右の法律の精神および当時の思想の一般的傾向を、もっともよく表示していると思われる、左の言葉を発見する。

『一定の職業に従事する市民に、彼等のいわゆる共同利益なるものために相集合すること
を許してはならぬ。国家内にもはや独立の利益を有する何等の団体も認められない、各個人の
特殊の利益と国家の一般的利益との中間には最早何ものも存在しない。市民の頭に中間的利益
の観念を注入し、団体の利益なるものによりて彼等を公共の利益より分離せしめんとするは、
何人にも許されないことである。』

「今ル・シャプリエ法は八箇条より成立しているが、その第一条はいっさいの独立なる団体を
廃止することは仏国憲法の根本的一原則であることを述べしもの。その第二条は右の観念を詳し
くまた開展して、同一の職業に従事する市民が相集まる時に、彼等のいわゆる共同的利益なる

ものについて規則を作るために団体を組織してはならぬことを規定するもの、その第三条はいずれの行政官庁も同一の職業に属する人々の団体からいかなる請願をも受理すべからざることと規定するもの。しこうして第四条以下はそれらの規定を犯すものに科せらるべき刑罰に関するものである。

「ただしル・シャプリエ法は、表面から観れば労働者の連合結社を禁ずるとともに、傭主企業家の連合結社をも禁ずるものである、しかし該法案討議の際の議事録によれば、該法律は商人が相集りて商工業上のことを協議するを禁ずるものではなく、商業会議所は該法律の適用を受けられないものであることが明らかに決議されていることを見るのである。」(米田氏一一——三)

労働者の運動は、どこの近代国家においても、すべてみなこれと同様な禁制の中から発達して来たものだ。近代国家のこの同じ特性の打破から生れて来たものだ。

五

なおこのシャプリエ法令に次いで、労働者の団結および労働条件改善の運動を禁ずる種々なる法令、種々なる条令が出た。そして一八一〇年の刑法はますます峻酷にその一般的禁制を確かめた。

「実にル・シャプリエ法を始め、その他の労働者階級の経済的地位に関する諸法律条令は、すべて彼等をして全然ブルジョワ階級に従属する状態に押し込めたもので、彼等は自由に連合することも団結することもまったく禁ぜられ、また手帳制度によって傭主に拘束せられ、しこうして出版の自由も、集会の自由も、選挙権もまったく与えられず、はなはだ憐れなる有様を呈しておいたのである。」(一五)

「が、その間にだんだん同盟罷業が行われて来た。」(一七)

米田氏の『革命的サンジカリズムの研究』は、この真最初から、レヴィンの『革命的サンジカリズムの研究』の翻訳である。原文と対照して見ればすぐ明白に分ることであるが、ほとんど原文そのままのずいぶんずい翻訳である。

しかし、というよりもむしろ、だからこの本は実にいい本だ。是非とも読者諸君の御一読を願う。そして僕がこれから言おうとする、先きの第二の理由についての詳論を、これまた是非とも御一読を願う。

レヴィンの著書が、フランスの多くのサンジカリスト等の著書の抜き書であることは、僕も知っています。しかしその抜き書が、あれほどまでに秩序よく整頓されていれば、それは立派な創作だと言えようと思います。

レヴィンのその秩序よく整頓された大体の結構をほとんどそのまま踏襲されたことが、僕にはやはり、どうしてもレヴィンの焼き直しだと見られるのです。

次には、レヴィンの著書とあなたの著書とを較べて見て、少なくともその最初の数十ページにおいて、ほとんどまったく一致していることが、やはり、どうしても、そう思わせるのです。

僕はあなたの著書が徹頭徹尾レヴィンの翻訳だとは言いません。レヴィンの中にはない、いろんなことがあなたの中に書かれてあることもとより認めます。ことに最近のC・G・Tの事情については、よしそれが『フィガロ』や『ル・タン』なぞの紳士閥の新聞から得られた材

料にしろ、僕は大いに教えられるところあったことを、あなたに感謝しています。

しかし、あなたの著書が、かつてあなたの書かれた古い論文を詳しくしたものだということは、私にはどうしても受取れません。あれとこれとはまったく違ったものです。一つは哲学的考察です。他は事実の記述です。

焼き直しだということは、著者たるあなたに取っては一大問題でしょうが、僕にとっては前にも言う通り、そんなことはどうでもいいのです。また、博士号云々のこともどうでもいいのです。それはただ、ふだんから尊敬しているあなたを槍玉にあげたことはなほはお気の毒であるが、一般の学者とか博士とかいうものに対する、僕のちょっとした悪ふざけです。

ただ、あなたの著書が僕に個人的および社会的の大きな憤慨を起させたのは、前にも言った第二の問題です。日本にはサンジカリズムの起る社会的事情が少しもないということですから。そしてサンジカリズムを鼓吹するものをまるで低脳児か何かのように嘲笑されたことです。

僕は前のあの文を序論として、あと数回続けて、あなたの著書を紹介しつつ、この点を大いに論じて見たいと思っていました。本号（編者註・「労働運動」二、次六号）では、お手紙があったために、それを載せることができませんでしたが、次号から引続いて書きます。（編者註・この純篇は）

怠業と勤業

260

従来フランス・サンジカリスト等の特徴であるかのごとく見做されていたサボタージュが、川崎造船所事件（大正八年）以来、日本にもほとんど流行的に行われ出した。サボタージュというその言葉すらが一流行語となっていたるところに使われ出した。

サボタージュはサボタージュである。決して怠業ではない。だから、そんな変な訳字は使わずに、フランス語そのままサボタージュと言うべきである、と言う人が大分ある。僕等もこれには一応賛成する。その語源が *Sabot*（木靴）を穿いてのらくら歩くように仕事をするとという意味であり、さらに遡ってはスコットランドの *Ca-canny* すなわちゆっくりと歩くことから来ているにしても、またその実際が怠業であるにしても、サボタージュは決して単にこれだけの意味ではない。しかしそれだけの意味でないものが *Sabotage and Ca-canny* に含まれ得るとすれば、怠業にだってやはり同じように含ませ得る訳だ。

言葉のせんさくなどはどうでもいい。が、このサボタージュそのものの善悪についても大衆議論があるようだ。しかし、いくら学者や資本家や役人が悪いと言おうと、それが労働者のどうしても取らなければならぬ手段である時には、何とも仕方がない。また、これを機会に治安警察法第十七条を問題にして、その撤廃さえ行われればサボタージュなどは決して起きない、と言う人もある。が、同盟罷工が労働者の権利であると立派に認められているところにも、やはりこのサボタージュは行われているのだ。

日本ではこの怠業という字が初めて使われたのは、本年（大正八年）七月二十三日の新聞に、博文館印刷所の男女職工千五百名が賃金三割増その他の要求条件を提出し、もし容れられなければ明二十四日から一斉に怠業を行う、という記事が現れた時からであろう。しかし実際には最近五月上旬、市ヶ谷秀英舎の欧文工五十余名が同職工高田公三君指導の下に十日ばかり継続してやったのを始め、七月十三日の神戸東洋燐寸、神戸市外の鉄道院鷹取工場等、決してその例に乏しくはない。

また、このサボタージュのもっとも重大でありかつ今日ではほとんど本質的の意味になっている、「罷工破りの就業を不可能ならしめ、罷工期間中作業の完全かつ真実の停止を来たさしめんがために、一時的にその運転を不可能ならしめる目的をもって、生産に要する機械装置の上に加えるあらゆる巧妙なる手段」という方は、よほど以前から日本にも実行されている。

現に精工舎罷業の煽動者として目下裁判中の、同職工芝山俊君のごときは、その嫌疑で収監されたのであった。数年前の東京の電車従業員罷業の際にも、大ぶそれが行われて問題になったことを覚えていて。その他探し出せばいくらもあるだろう。

また、サボタージュのもう一つの、実際には本来の意味の、「他に救済方法のない場合に備主から一層有利な雇備条件を獲得し、もしくは約定せられた雇備条件の実行を強制し、または在来の雇備条件維持の目的をもって、一人または多数の労働者が、工業界にあつてはその生産物の上がりが遅緩にしましては減少し、商業界にあつては事業を拘束し利潤を減少せんとするといった意識的行動」という方も、先きに言った以外に、ずいぶん古くから行われていることである。そしてそれは関西地方では「柳」、または「阿弥陀」の名で古くから通っている。

要するにだ、労働運動の諸方法は人が人を擯取することの始まったと同時に、自然に自発的にいたるところに始まったもので、どこの特許ということはない。労働運動そのものにしてもやはり同じことだ。外来思想だの、翻訳思想だのというのは、学者の理屈のことで、労働運動の事実はずべてみなその国固有のものだ。善い悪いのと言って治まるものでもなし鎮まるものでもない。

ところでだ、サボタージュは卑怯だとか男らしくないとか、または労働者の道徳的性質を墮

落させるとかいう批難があるが、このサボタージュの方法として、大いに勇敢でありかつ大いに道徳的である勤業というのがある。まだ誰もそんなふうには翻訳していないが、何でも規則づくめにきちんきちんとやって、生産なり運輸なり事務なりの進行を滞おらせるオプストラクショニズムのことだ。かつてイタリアでは鉄道従業員がそれをしてやって全国の鉄道を止めたことがある。

この勤業も大仕掛にはまだないが、個人的にはちょいちょい日本でも見られる。何か癪にさわると、規則を楯に取って、どうしても上役または客の言う融通をつけてやらない、厄介な先生がある。しかしこれはサボタージュよりも一層の組織と連絡があるので、よほど難しいことらしい。難しくして仕合せだ。そんなことを絶えずやられた日には堪ったものでない。

Syndicalism の研究

丸善に Arthur D. Lewis の Syndicalism and the general strike という本が来ている。どんな内容のものかというお尋ねもあったから、ここでちょっと紹介して置く。

一体サンジカリズムは、理論よりも実行を尚ぶのだから、そしてその理論は長い間の実行の結果として生じたのだから、この主義を本当に理解するには、その運動の歴史を一步一步研究して行かなければ駄目なんだ。しかるに大概の紹介者は、その理論のみを説いて、運動の歴史はまったく閑却しているものが多い。

この本もやはりそうだ。最初にフランスにおけるサンジカリズムの伝道用書を抜書して、次にこの主義の理論の代表者ともいうべきソレルの生涯と著作とを紹介し、最後にイタリア、ドイツ、イギリス、およびスペインにおけるその運動の瞥見を下している。

紹介は忠実にできている。むしろ忠実すぎるくらいだ。いろいろなサンジカリズムの著書の

文句を抜書した、この方法も善かろうが、もう少し註釈がなければ、素人にはちょっと分りかねるところがある。

著者は社会主義学者として名ある人だ。

ついでに丸善に来ていた、あるいは来ている、他のサンジカリズムの本のことにしてもちよつと言つて置く。

Arthur Clay の Syndicalism and Labour は、この主義の紹介としてよりはむしろ攻撃として現れたもので、著者がその資本家主義的見解から筆を下して、その材料も大概タイムスに仰いでいることは、あらかじめ承知して掛らねばならぬ。しかし一九〇七年から一九一〇年に至る、ヨーロッパのあちこちのストライキのことなどは、なかなか面白く書いてある。

目下英文でできているサンジカリズムの本は、この二冊と、外に Louis Levine の The labour movement in France とがあるくらいのもものと思つ。

この最後の本の著者は、コロンビア大学の教授で、まったく学者としての研究的態度をもつて書いたものらしい。

サンジカリズムはフランスでできたものだ。そしてその他の国では、今ようやく起りかけているぐらいに過ぎない。したがってその研究はどうしてもフランスに拠らなければならぬ。

この本はバリ・コミュニケーション以前の仏国労働運動に筆を起して、労働総同盟の成立を詳述し、

さらにその理論と理論家とを紹介し、最後にサンジカリズムが独立の運動としてまた理論として勃興した一九〇二年以来のその運動を説いている。

サンジカリズムに対する政府の態度、ゲジストや、ブルーシストや、アルマニストや、プランキストや、またはアナキストとサンジカリストとの関係なども明白に記されている。

どちらかと言えば、僕はサンジカリズムの研究書としてこの本をもっとも推奨する。仏文で書いた書物の中でも、一冊ものとしてはあるいはこれに越すものがないかも知れぬ。

最後にちょっと書き加えて置くが、日本文で書かれたサンジカリズムの紹介としては、まず読むに足るものは、福田博士の『経済学研究』の一節と、米田庄太郎氏が『京都法学会雑誌』の六、七月号に寄せた論文の二つに過ぎない。米田氏はベルグソンとサンジカリズムの関係を紹介した、日本における最初の人であらう。

『現代八面鋒』（久津見巖村著）

先きに『人生の妙味』を公けにして、ニーチェの『ツアラツストラ』を説き、不幸政府の忌諱に触れてその発売を禁止せられた著者が、その後久しく病床に横たわって、八ツ当りに当たった気焔録である。世界の問題、時代と人物、現代小観の三篇に分ち、なおその各篇に十数の論文雑録を収めてある。後の二篇の中にも多少著者の主張の現れていないこともないが、恐らくは第一篇の中の夢の道士の研究や、シャボン玉の宇宙観やまたはわが神学小史などをもって、著者をもっとも苦心の作と観ねばなるまい。

夢の道士の研究は、ニーチェの新しい研究である。シャボン玉の宇宙観は、「世界は種々雑多の物類の群生変化しつとあるところである吾人には測り知れぬ連続である」という多元的見解から、「世界の实体は絶対——神——である、万物はその部分でつまり絶対の表現したものである」という汎神論に痛棒を加えた著者の哲学観である。そしてわが神学小史はまた、幼